

# ブータン仏教研究プロジェクト

鎌田東二(こころの未来研究センター教授) + 熊谷誠慈(同上廣こころ学研究部門特定准教授)

## ■研究の背景・目的

わが国でブータンが有名になったきっかけは、2011年11月の、ブータン王国第5代国王ジクミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク陛下のご来日であろう。当時の過熱報道は記憶に新しいが、以後もブータンに関する言論は跡を絶たない。

ただ、それ以前から、ブータンは国際社会の注目するところであった。というのも、同国の国家指針として名高い国民総幸福量 (GNH) 政策は、GNP・GDP至上主義に対するアンチテーゼとして、すでに1970年代にジクミ・センゲ・ワンチュク第4代ブータン国王によって提唱されており、それが世界各国の幸福政策のモデルの1つとなってきたからである。

わが国では21世紀を迎え、日本GNH学会や日本ブータン研究会などの学会組織が立ち上げられたほか、京都大学においては、2010年に京都大学ブータン友好プログラムが、2012年には京都大学ブータン研究会が発足し、ブータン研究がいよいよ本格化してきている。

ただ、忘れてはならないことはブータンが仏教国だということである。つまり、ブータンの政治、経済、教育、医療、文化など、ありとあらゆる局面が、直接あるいは間接に仏教との関わりを持っている。この点を無視して、ブータンを真に理解することはできない。すでに、Michael Aris氏や今枝由郎氏などにより、ブータン仏教の歴史的な歩みについては研究が進められてきたが、その思想的理念や現状などは、ほとんどが未解明のままである。

そこで2011年、熊谷が中心となり、王立ブータン研究所(Centre for Bhutan Studies)と共同で、「ブータン仏教研究プロジェクト」(BBRP: Bhutanese Buddhism Research Project)を立ち上げ、ブータン仏教の包括的研究を進

めてきた。2012年4月には、京都大学こころの未来研究センターに「ブータン学研究室」を開設し、同研究室の基幹研究プロジェクトとなっている。

## ■研究方法・研究内容

本プロジェクトは以下の3つの柱に沿って進められる。

(1) 文献研究 (文献学に基づいてブータン仏教の思想・歴史を解明する)

(2) フィールド研究 (現地調査によりブータン仏教の現状を解明する)

(3) 学際的研究 (後述の研究会等を通じて異分野のブータン研究者間で情報交換・共同研究を行う)

### (1) 文献研究

- ・ドゥク派: ツアンパギャレー (1161-1211)、パジョ・ドゥゴムシクポ (1184-1251)、ペマ・カルポ (1527-1592)、シャブドゥン・ガワンナムゲル (1594-1651) など重要な僧侶の著作を研究。
- ・ニンマ派: ロンチェン・ラブジャムパ (1308-1363) や、ペマリンパ (1450-1521) などの作品を研究。

- ・ツアンパギャレー著作集の原典研究: ブータンの国教であるドゥク派の開祖ツアンパギャレーによる著作集の校訂テキストおよび現代語訳を作成し、内容の分析を遂行中である。

### (2) フィールド研究

主要宗派および少数宗派の現状を实地調査する。

- ・主要宗派: ドゥク派、ニンマ派

- ・少数宗派: サキャ派、ゲルク派、ボン教、地域信仰

現在、ブータンにかりうじて残るサキャ派の寺院を調査中。1959年のチベット動乱時にサキャ派の僧侶は寺院を捨ててチベットに帰還、現在はドゥク派の僧侶によって管理されているという事実を突き止めた。

## ■研究会・講演・シンポジウム

### 1. BBRP 国際シンポジウム

2012年1月10日「これからの社会における仏教の可能性: 仏教国ブータンからの提言」

### 2. ブータン文化講座

2012年7月6日「仏教と戦争: 第4代ブータン国王の場合」今枝由郎 (フランス国立科学研究センター)

2012年10月18日「イエズス会宣教師の見たブータン: 仏教徒キリスト教」ツェリン・タシ (王立自然保護協会)

### 3. 京都大学ブータン研究会

- ・第1回「京都大学ブータン研究会の方針について」2012年5月10日

- ・第2回「龍の国への扉」坂本龍太 (京都大学) 2012年7月19日

- ・第3回「ブータンの歴史と仏教」熊谷誠慈 (京都女子大学・京都大学) 2012年10月4日

- ・第4回「"Bhutan Transport 2040"を紐解く」塩見康博 (立命館大学) 2012年12月4日

## ■今後の展望

ブータン学研究室では、これまで文献およびフィールド研究を主としてブータン仏教研究を推進してきたが、今後は、GNH、環境、教育、伝統文化などもあわせた学際的・総合的研究へと発展させていく予定である。



川岸からのプナカゾン